第3回ダイワハウス住宅設計コンペ

テーマ座談会

戸建て住宅のポテンシャル

山本理顕（横浜国立大学教授，建築家）
藤森照信（東京大学教授）
千葉学（東京大学大学院准教授，建築家）
西村達志（大和ハウス工業 取締役専務執行役員）

これからの戸建て住宅は周辺のインフラを無視できない

編集　ダイワハウス住宅設計コンペも今年は3回目となりました．将来を見据えてリアリティのある住まい方を考えるこのコンペへの関心は，回を重ねるごとに高まっています．今年も，審査委員の皆さんによる座談会で課題テーマを決定していただきたいと思います．まず，山本先生から最初にお話ください．

山本　このコンペの1回目と2回目は，結果的に集合住宅のアイデアが多くなりました．今回は少し方向を変えて，戸建て住宅をテーマにしてはどうでしょうか．

主催　戸建て住宅を課題にする場合，施主像が大きいと思うのですが，施主がなぜ戸建てを選ぶのかという視点もあります．集合住宅よりも内部空間を自由にできるよさをもっていますよね．

千葉　小さくても戸建てがよいという選択はたしかにありますね．住宅を供給するスピードと数でいえば，戸建てよりも集合住宅が圧倒的に増えていますけど，今の時代は郊外へのスプロールと，郊外から都心に移り住むのが同時に起きている不思議な時期だとも聞きます．戸建てにもまださまざまな可能性がありそうですね．

藤森　郊外住宅地の開発では，いまだに夫婦と子供ふたりを家族構成の基本とすることが一般的ですよね．それについてはどうですか？

山本　実態としては高齢者のふたり住まいが多いと思います．高齢者が老朽化やライフスタイルの変化によって住み替えをする場合，どのように住むのか，将来の展望も含めて考えるというのはかなり現実的な問題です．

西村　分譲マンションを買う人は，高齢者層が意外と多いです．だからといって，戸建て住宅が若い人たち向けなのかというと，そうではないと思います．2007年問題で団塊の世代がこれから大量退職していきます．一家のご主人は，強く社会性が求められてきた中で生きてきたわけですが，彼らが退職後に何をするか．2007年問題は，スキルや労働力が失われるとネガティブにとらえるのではなく，新しい文化や考えが生み出せるととらえられないでしょうか．現在，団塊の世代の多くは郊外の戸建て住宅に住んでいますが，定年退職や子供の独立を契機に，そこを売り払って都市部の便利なマンションへ住み替えるという傾向もあります．ですから，これからの高齢化社会や団塊の世代のことも含め，住まいを年齢に応じたかたちに変えていけるか．そのあたりのとらえ方はおもしろいテーマになりそうな気がします．

藤森　実際，子世帯が親世帯と一緒に住むことはあるし，古い家を取り壊して子世帯と親世帯で分割することもある．それから定年後に故郷へ帰ったり，東京の住宅を売り払って沖縄や北海道に移住するとか，結構実行している人はいるよね．移住した場合，彼らは地域コミュニティの中に完全には入れないけど，距離を保ちながらその周辺に入る．ただ，それで社会が大きく変わる感じはしませんね．

千葉　団塊の世代の人の中には，たまたま同じ趣味やスポーツをやっている仲間ができて，それを楽しむために今まで住んでいた家を売り払い，移り住んでしまう人もいるという話も聞いたことがあります．その場所のコミュニティに必ずしもこだわるということではなく．

藤森　土地へのこだわりはそれほどないでしょう．秋葉原のように，ある趣味嗜好をもった人たちが特定の場所に集まるというものができたら結構おもしろいかもね．

山本　最近の戸建て住宅を見ていて気になっているのですが，建築家は与えられた敷地や周辺インフラに対して，あまりにもそれらを引き受けすぎているのではないでしょうか．特に，戸建て住宅では厳しい敷地条件の中ですべてを引き受けるその困難さを競っているような感じがします（笑）．そういう戸建て住宅のつくり方がはたして力になりうるのかと思うところがあります．

設計をする際，設計者は対象となる住宅に向き合うのは当然なのですが，住宅の中だけですべてを解決するのは本当は無理だと思う．実は住宅は大きな都市インフラの一部としてつくられている．ですから，それらとどのようにかかわるかがテーマになりそうな気がしています．たとえば，都市部ではコンビニが500m圏内にひとつある状態になっているわけですから，コンビニがない生活は考えられない．あるいは保育園もそうだし，銭湯も場所によってはまだ健在です．他にも道路や駐車場，エネルギー供給，上下水道等のような，住宅の外側にあるインフラをどのようにとらえるかを考えてもらえたらよいと思うのですが．

――提供：大和ハウス工業――

審査委員長：
山本理顕（横浜国立大学教授，建築家）

やまもと・りけん／1945年北京生まれ／1968年日本大学理工学部建築学科卒業／1971年東京芸術大学大学院美術研究科建築専攻修了後，東京大学生産技術研究所（原研究室）／1973年山本理顕設計工場設立／2002〜07年工学院大学教授／2007年〜横浜国立大学教授

藤森照信（東京大学教授）

ふじもり・てるのぶ／1946年長野県生まれ／1971年東北大学工学部建築学科卒業／1978年東京大学大学院修了／現在，東京大学教授

藤森　コンビニの話に近いですが，日本の下町に総菜屋がたくさんできたのは家でおかずをつくらなかったからだそうです．ご飯と味噌汁をつくったら，あとは買ってすませていた．それから台湾の家には台所も食堂もないところがあるみたいです．近所の食堂に自分の家族が使うテーブルがあって，ある時間になるとそこに家族で行って食べる．それで平気だと．

山本　香港の高密度住宅にも台所がないものが多いですし，インドネシア・カンポンでは家の前を通る行商人を呼び止めて買えば，あらゆるサービスがすむそうです．日本でも，そういうインフラとの関係を考慮に入れて住宅を考えてもらうと変わるかもしれない．

近代の住宅論は人と家族と社会のことばかり
家に溢れる物の意味を考える

千葉　住宅に何が本当に必要かということを考えている人は増えている気がします．たとえば，キッチンは煩わしいから必要ないけど，自分の特技や趣味を生かした教室ができるスペースをもった家がほしいということも，リアリティのある話だと思う．それはコミュニティに関連することかもしれませんが．

西村　東京では建て替えが意外と多いのですが，マンションに住み替えたり，環境を変えたり，夫婦ふたりの関係を変えたり……いろいろな選択肢があると思います．今，千葉先生がおっしゃったような，その人にあった家の使い方が大事になるのかもしれないですね．

千葉　最近おもしろいと思うのは，家を建てる動機が昔と違って多様なことです．単身者で家を建てたいという人も多いように感じますが，彼らは車を買う，その次ぐらいの感覚です．たまたま今かかわっている地方では，土地が広いから庭先に離れのように家を建てたりする．まさに車の延長であって，大きな自分の部屋そのものを家として建てようとしているわけです．

西村　戸建てというとフルスペックの家を連想しがちですが…….

山本　でも，実はオーバースペックになっている．だから価格も高いですよね．また，実際の住宅には，デッドスペースがかなりある．以前，学生が調べたことがあるのですが，家の中にある物によって床面積のかなりの部分が占められている．

藤森　そう．実際に人が動けるのは総面積の半分くらいだよね．

西村　ひょっとしたらストックヤードが住宅の外側にあったほうがよいかもしれないですね．いらない物といる物，それぞれのスペースを機能ととらえて，自分にとって価値ある機能を最大限に表現するためにはどのように家をつくり替えたらよいのか．家の価値にはいろいろな考え方がありますからおもしろいかもしれない．

山本　たしかに，そうすれば住宅は相当身軽になりますね．

藤森　収納に関して僕の経験からいうと，床下収納があったとしても全然足りない．何年かに一度，田舎に本をストックする場所をつくって，運んでいるけどあまり楽になってないよ（笑）．むしろ本は増える一方で，東京の家はちっとも広々としない…….
戦後の住宅についての議論には，間取りやLDKをテーマとしたものはあるけれど，収納論はない．家に溢れかえる物には一体どういう意味があるのか考えてもらったら？

千葉　僕なんか自転車が好きなので，自転車や部品とかが室内に山のように置いてあって，それら自転車の隙間を動いて生活している（笑）．そういう意味では，住宅に置かれている物はその人の生活の歴史や記憶をいろいろ背負っている．

藤森　建築家が収納を本気でテーマにした家は，坂本一成さんが設計した「House SA」（『新建築住宅特集』9908）ぐらいかな．コレクションした焼き物を，どのように飾って毎日眺めるかを考えた結果がおもしろくて，プランがスパイラルになっている．自分の好きな物の間を動線が立体的に抜けていく感じです．物のために家はあって，人はその間で生きていくと（笑）．今まで住宅は人間のためのものだと思っていたけれど，物のためだよ．実際の面積で考えてみてもそうなっていると思います．

山本　机の上にしても常に物置状態になっているし．

藤森　これは聞いた話ですが，車庫に扉をつけて主人の部屋にした住宅があるみたい．駐車場の横に机を置いて愛車を見ながら毎日暮らしたいと．ご飯を食べ終わったらそこで車の臭いを嗅ぎながら本を読んだりしていて，それに慣れている．

山本　それもいわば収納ですね．

千葉　僕も，物と空間の話はとてもおもしろいと思います．都築響一さんの『TOKYO STYLE』（京都書院，1997年）では，部屋に置かれた物が自分のライフスタイルの表現だと示していた．でもその一方で，物をどのようにストックしていくかという問題もありますね．

藤森　収納と住宅を正面から考えなさいという課題はどうかな？「収納住宅」とかいって（笑）．

山本　たしかに収納という要素を考えるのはあり得ますね．六角鬼丈さんの「伝家の宝塔 自邸計画No.1」というプロジェクトを思い出しました．吹抜けに面した巨大な家具に六角家に伝わるさまざまな物がすべて飾ってあって，自分の家の歴史がそこを見るとわかるようになっている．

千葉　物をたくさんもちたいという所有欲と，戸建て住宅をもちたいということは，もしかしたらつながっているのかもしれない．施主と打合せをすると，所有している物の話が最初に出ますよね．絵，本，

――提供：大和ハウス工業――

千葉学（東京大学大学院准教授，建築家）

ちば・まなぶ／1960年東京都生まれ／1985年東京大学建築学科卒業／1987年同大学院専攻修士課程修了／1987～93年日本設計／1993～96年東京大学建築学科キャンパス計画室助手／1998～2001年同大学院建築学専攻助手／2001年千葉学建築計画事務所設立／現在，東京大学大学院建築学専攻准教授

西村達志（大和ハウス工業 取締役専務執行役員）

にしむら・たつし／1949年宮崎県生まれ／1972年京都大学工学部建築学科卒業／1972年大和ハウス工業入社／現在，大和ハウス工業 取締役専務執行役員 技術本部長

食器等，人それぞれです．記憶や生活を含めたいろいろなものが物には宿っているので，物と共に暮らすことを真剣に考えるのはあながち侮れないかもしれない．

藤森　近代の住宅論は人と家族と社会のことばかり考えていたから，やっぱり根本的に間違ってたのかな…….

主催　いらない物も含めてストックできる住宅という意味では，ハウスメーカーがつくっている住宅はどれもそうなっています．その考え方がよかったのか考え直す時期なのかもしれません．

千葉　モダニズムは純粋に空間の問題ですから，物のことはパラメータにまったく入っていない．その対極が『TOKYO STYLE』に出てくる．ですから，それをもう一度考え直すのはよいかもしれない．日本ではノマドは成り立たなかったと，真っ向から否定するわけですよね．

山本　ミースもル・コルビュジエの住宅も収納はないね．

藤森　モダニズムは工場の論理ですからね．大量に物をつくるけど，それを売る段階のことは一切考えない．僕の知るかぎり，戦前の段階で，消費の問題を真面目に考えた人は今和次郎だけです．今の住宅は人が住んでいるのか物が住んでいるのかわからない状況だけど，物に溢れた中に住みたいと思う人もいるし，完全に物を隠したいという人もいると思う．

千葉　普通，収納スペースはパーセンテージで規定しているでしょうけど，実際には藤森さんの家のように本が積まれたり，規定以上に物が溢れていますよね．いわゆる空間として残っている部分は想像をはるかに超えているわけです．

生活と空間をセットで見直す
住宅の「リストラクチャリング」

山本　このあたりでテーマを整理したいと思うのですが，「収納」だと提示しただけでは伝わりにくいでしょうから，今回もこちらから大枠の設定をしましょう．前回同様，具体的な敷地を設定し，面積，建蔽率，容積率など敷地条件を満たすこと．その上で，施主像については応募者にシナリオを想定してもらう．団塊の世代，あるいは高齢者，もしくは，そこまで限らなくても高齢化していくことは前提にしたいですね．たとえば，高齢にさしかかった人が住んでいる家が老朽化しているので建て直したい．けれども，その人たちはあと20年後ぐらいには亡くなってしまう．そういう人がこれから新築するときにどんなものにするのか．施主が住まなくなった後の活用法も考えてもらう．具体的な提案が出てきたらおもしろいと思います．同時に収納についても考えてもらう．ある年齢になると，自分の記憶と一緒にさまざまな物がある．それらはどのように処理したらいいのか．物の内容やヴォリューム，物に対する意識は千差万別ですが，応募者に具体的に想定してもらいましょう．さらに，周りの都市インフラも周辺図に提示しておいて，それらとの関係も考えてもらったほうがよいと思います．銭湯やコンビニ，コインランドリーといった一般的な施設で十分だと思います．そうじゃないとリアリティがないですよね．戸建て住宅でも，独立してあるわけではなく，都市インフラとかかわりながらあるし，コミュニティの中にある．そういう意味では，インフラ自体の提案をしてもらうこともあり得るのではないでしょうか．これからの社会を踏まえた新しい都市インフラを含むような…….

千葉　空間だけではなく，都市や社会を考える意味でもおもしろいテーマですね．そういうものをもう一度考えると建築の空間は変わってくると思う．周囲のインフラがあるからある種の割り切りもできる．実際，高齢者で空間をリストラしたいという人もいます．家をずっと守ってきたけれど，子供が独立して自分たちが高齢化すると，それまで子供が使っていたスペースを何に使っていいかわからなくなったり，結局部屋を収納として使ったりしている．ようするに，自分たちの生活には大きすぎて，まさに死んでしまっている空間をどうしようかと思っている．ですから，もう一回家を組み直したいという動機で家を建て直すことはあるような気がします．

山本　リストラされた空間はどうするの？　その使い方も当然問われますよ．簡単にはリストラできないのが収納の話ですよね？

千葉　切り捨てではなく，もう一度組み立て直すという意味での「リストラクチャリング」です．空間をリストラクチャリングして，趣味の空間や自分たちだけのパーソナルな空間とはどういうものなのかを考えたり，あらためて物について考えたり．生活を空間とセットで見直すこともあり得ますよね．生活と空間を再構築することは，これから先の老後を生きていくモチベーションとして重要だと思います．

藤森　なるほど．定年以降のモチベーションとして，自分でテーマを決めて住宅に取り組むと．いいね．応募する前にこの座談会を読んだ人は，大体のイメージがつかめたんじゃないかな．

編集　では，第3回のタイトルは「住宅のリストラクチャリング」というのはどうでしょうか．

山本　いいですね．きっと地下をつくる住宅もあるだろうし，「収納住宅」もあるでしょう．いろいろな提案があり得ると思いますよ．

西村　従来のような類型化やアレンジによる住宅ではなく，周辺のインフラや物と家の空間の関係性というさまざまな要素が絡み合った中からどのような住宅が提案されてくるのか．リストラクチャリングは積極的な意味ですから，若い人たちの視点でとらえた住宅を楽しみにしています．

（2007年2月20日，新建築社にて．文責／編集部）